

〔論 文〕

アメリカにおける児童図書の情報提供： その変遷と社会的背景

藤 野 寛 之

I はじめに

児童図書の出版は、欧米にあつては19世紀後期に「黄金時代」を迎えたと言われている。事実、ストウの『アンクル・トムの小屋』（1852）、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』（1865）、オルコットの『若草物語』（1868）、マーク・トウェーンの『トムソーヤーの冒険』（1876）、バーネットの『小公子』（1886）は、それまでの子どもたちの読み物であつた成人図書の要素を持つ作品（『アラビアンナイト』『ガリバー旅行記』『グリム童話集』など）とは異なる、子どもたち自身の冒険やその社会的な成長、子どもの幻想の世界が描かれていた¹⁾。しかも、これらの作品は当時ベストセラーとなっており、出版社は作家にその続編を期待するほどであつた。とはいえ、真の「黄金時代」は、19世紀末から20世紀にかけて開始されたのであつて、この時期に刊行された作品、ビアトリクス・ポターの『ピーターラビットのおはなし』（1902）、ケネス・グレアムの『たのしい川べ』（1908）、ミルンの『クマのプーさん』（1926）、ワンダ・ガアグの『100まんびきのネコ』（1928）その他は、それまでにあまり見られなかつた主人公の動物と自然の環境を取りあげたばかりでなく、画家との共同作業もしくは作家＝挿絵画家の登場により「子どもの絵本」の新たな時代を実現させたものであつた²⁾。これらの作品はすでに新しい「児童文学の古典」と見なされている。さらに、1950年代および1970年代に新たな段階の飛躍をとげていた。すなわち、1950年代には才能ある移民の子弟である画家、ドクター・スース（シオドア・スース・ガイゼル）やモーリス・センダック、その他の出現、1970年代には青少年（ヤングアダルト）に向けた作品群の刊行、ならびに、各国の児童書の翻訳（トーベ・マリカ・ヤンソンやディック・ブルーナ）により児童図書のジャンルはさらなる広がりを見せていた³⁾。現在、児童書（ノンフィクションを含む）の出版は盛況であつて、その目録（書誌）も出版されており、どの図書館でも児童文学のすべてを収容しきれなくなっている。こうした盛況を支え、児童文学の地位を「真の文学」にまで高めた役割を担っていたのが「書評誌」であつた。特にアメリカでは児童書出版の新たな時期ごとに新しい企画が出現しており、現在に至るもなお、複数の定期刊行の「書評誌」が共存している。本論考では、そうした児童書の「情報提供」を目的としたメディアがいかなる時代的な背景のもと、いかなる意図で実現されており、それぞれがいかに異なり、それらがいかなる問題を抱えているかを論証する。

II 『ホーン・ブック (Horn Book)』 1924-

1924年に創刊された書評誌『ホーン・ブック』は、2010年には第86巻を刊行しており、1-9巻までは季刊、それ以後は隔月刊であつて、巻号を合わせると全部で500冊にならんとする書評誌である⁴⁾。1924年といえば、わが国では昭和期に入る二年前であり、児童向けの作品には宮沢賢治や小川未明の創作童話、吉屋信子の感傷的な少女物語が存在し、その後の昭和期には「軍国主義」的な主人公の海外での活躍が主であつた。これに対して、19世紀末から20世紀初期にかけてのアメリカの児童図書の出版はどうであつたのか。今では古典と見なされる傑作が相次いで刊行されていたとともに、エドワード・ス

トラテマイヤーが、少年・少女の探偵が活躍する「ハーディボーイズ」シリーズや「ナンシードルー」シリーズ、冒険物の「トム・スウィフト」シリーズを、多数の執筆者を動員して何十冊という単位で書かせていた⁵⁾。さらに、少年が苦境を乗り越えて社会のなかで成功する物語は連作物により語られていた⁶⁾。第一次世界大戦においてほぼ無傷であったアメリカには、成功を夢みる移民がヨーロッパ各地から押し寄せており、読書と映画は市民のかけがえのない娯楽であった。

ボストンの書店主として出発したバーサ・マオニー（後に結婚してミラー姓となる）は、世にあふれる児童書のなかから「良書とその読書」を標榜した雑誌の刊行を思いついた⁷⁾。児童図書の挿絵画家としてすでに知られていたイギリス人カルデコットによる三人の騎乗の猟師が「ホルンを吹き鳴らしている」絵は、その後のこの雑誌の象徴となった⁸⁾。誌名は「ザ・ホーン・ブック」から1944年2号より「ホーン・ブック・マガジン」に変わったが、内容は現在に至るも一貫している。作家・画家・批評家・学校の教師・図書館員・市民による児童書の評価が中心であるが、そこでは児童書の種類（創作童話、民話、ファンタジー、詩、絵本、その他）、小説作法、読書（ストーリーテリングを含む）がテーマとして取りあげられている。学齢前と小学校の低学年の児童に向けた図書が主たる対象となっている。

この雑誌が児童文学の成立のうで果たした役割は大きい。「児童文学」に対する世間一般の概念を改めさせたからであった。それには、以下の三つの要素が重要であった。第一に、19世紀と比較すると作品の内容の変化が見られたからである。その背景は、シャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』に出てくる牧師館の学校でいじめにより死去した児童を「神のおぼしめし」として感謝するヴィクトリア朝のモラルが支配していた19世紀とはまったく時代が変わっていたのであった。第二には、信念に依拠した個性的な批評家が文章により批評を展開していたことがあげられる。その代表格は、ニューヨーク公共図書館児童室のアン・キャロル・ムーア、および、ムーアの弟子にあたり、ニューヨーク公共図書館の児童図書館員を引き継ぎ、後にカリフォルニア大学の教授となったフランセス・セイヤーズ、さらには、ムーアのもとで修行を重ね、カナダのトロントで児童図書館を設立したリリアン・スミスであった⁹⁾。ムーアもセイヤーズもともに自分でも創作童話を書いており、ムーアにいたっては人形を使っているストーリーテリングを生み出していた。セイヤーズはムーアについて取りあげた、優れた伝記を書いており、そこでムーアのことを天才と評していた¹⁰⁾。ムーアが『ホーン・ブック』に連載した「三羽のフクロウ」という連載コラムは批評家としてのムーアの才能を遺憾なく発揮していた¹¹⁾。

この雑誌が成功した第三の要素は、図書館の存在にあった。編集長マオニーが活躍した第二次世界大戦終了をはさんだ約25年間は、アメリカでも各都市の公共図書館が発展した時期であり、1911年に五番街に建設されたニューヨーク公共図書館本館はその最大の象徴となっていた。すでにアメリカでは、児童室を構える図書館も多く、開架制度が定着しており、児童図書館活動は活発であった。『ホーン・ブック』は創刊以来、児童室のコレクション構築のための指針となっていた。児童室にかぎらず、この雑誌は、その内容をなすやさしく読める記事のため、どの公共図書館でも利用者全般に提供されていた。さらに、英語で記載された雑誌はすでに第二次世界大戦以前より世界的に読まれていたのであって、それがこの雑誌の刊行を財政的に成り立たせていたのであった。

『ホーン・ブック』社は、何度かにわたりこの雑誌の代表的な論文を抜粋して編纂し、別冊として刊行しているが、その内容を見ても、この雑誌がいかに広いテーマ（例えば、作品の種類と小説作法、読書の効用、その他）を網羅しているかが容易に理解できる¹²⁾。

それにしても、現在まで7代にわたる歴代の編集主任の「編集方針」は今後それぞれ検討しておくことが肝要であろう。初代編集長マオニーが指摘したとおり、「本誌は時代を反映して変化していかねばならない」点から、歴代の編集主任のそれぞれの時期の「編集哲学」は調べておく必要があるだろう¹³⁾。急速に国際化した時期のもの、人種差別が問題となった時期の児童図書は、第二次世界大戦直後の時期のものとはまったく異なるためである。1970年代以後には、才能ある挿絵画家の出現によりさらに新たな変化が生み出されていた。

とはいうものの、90年近くにわたり刊行を続けたこの雑誌にあっては成功面ばかりではなかった。その最大の難点は索引にあった。各年（各巻）の最終号（1934年以降は第6号、2009年までこの試みは続いた）には一年分の内容が索引として編纂されているが、長年にわたるためか、方針が必ずしも一定していない。この雑誌の場合、他の雑誌とは異なり索引化がきわめて困難であった。多数のきわめて短い文章（1頁程度のものが多い）から成り立っている記事には、その作者がおり、題名があるだけでなく、取りあげられた作品の原著者と書名、引用された原作、挿絵画家、表紙の画家の名前、そのすべてが人名および題名として項目になっておらねばならないが、その数が多すぎるため編集方針が年により一貫しているとはいえない。しかし、少しばかりの不備があろうと、索引は児童書の変遷を知るために必須であろう。索引による体系化の試みがあつてこそ、特定の作品がいつ、どのように評価されはじめたのか、それがどのくらいの頻度で引用されているかを把握できる。特に「古典」と見なされる作品についてはそうしたデータが必要であり、一つの作品にどれほどのさまざまな意見が存在するのか、これもまた児童図書を「文学」として成立させる要素だからである。

Ⅲ 『ジュニアの本棚（*The Junior Bookshelf*）』 1936-1996

19世紀から児童図書の出版が盛んであり、数々の作家と画家を産んでいたイギリスでも、『ホーン・ブック』に対抗する児童図書の批評・紹介誌が1936年から刊行されていた¹⁴⁾。第二次世界大戦開戦の三年前であり、イギリスは経済的に厳しい時代であったが、この国ではすでに、オーストラリア、ニュージーランドその他の英語国を連邦内に抱えており、そうした国での出版にも影響力をもっていた¹⁵⁾。植民地時代からこれらの国は主要都市にイギリスの出版社の支店を構えていた。オーストラリアの児童書出版の歴史はイギリスの児童書の模倣から出発していた。『ジュニアの本棚』は世界の児童図書出版状況の紹介と主要作品の分析記事を主としていたものの、隔月刊のこの雑誌の毎号には新刊書の批評が載せられていた。しかし、第60巻6号（1996年12月）をもって廃刊となった。60年間の歴史は、イギリスの児童図書館活動の支えであったところから、この廃刊は惜しまれる。情報提供分野において、アメリカの実利的な出版手法に対抗できなかった。児童図書館活動にも積極的であったイギリスの雑誌であり、アメリカとの比較のためにここに取りあげた。

Ⅳ 『児童図書センター報告（*Bulletin of the Center for Children*）』 1945-

第二次世界大戦後の1945年、児童図書に関する情報提供のうえで新たな出版物が刊行された。シカゴ大学図書館学大学院が編纂する月刊誌（年11冊刊行）であった。この雑誌は、1992年からはイリノイ大学の図書館学大学院に編纂が移行して、ボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学出版会から刊行されている¹⁶⁾。シカゴ大学で図書館学大学院が創設されたのは1926年であり、そこでの研究と教育についてはすでに解説がされている¹⁷⁾。ここで大学院レベルの児童図書の研究が第二次世界大戦後に開始されたことになる。アメリカでは、児童書とその挿絵についての表彰として、それぞれ「ニューベリー賞」（1922）、「コルデコット賞」（1938）がこの時期に制定されており、このジャンルへの関心がいっそう高まっていた。

『児童図書センター報告』は児童図書の紹介と評価を内容としている。2010年刊行分を例にとると80頁ほどからなる毎号（7-8月は合併号）には、ほぼ50-60冊の児童書が取りあげられているため、年間で約600冊が紹介されていることになる。この雑誌の特徴は、各冊300語程度の「あらすじ」の紹介と「必須」もしくは「不要」といった評定がなされている。各図書の読者のための年齢もしくは学年も記録されている。この雑誌が対象とする図書も小学校までの児童であった。アメリカでは新刊書の情報提供には長い伝統があり、例えばアメリカ図書館協会では、図書館が取りあげうる全領域の図書選択の指針を『チョイス』という定期刊行物で紹介している¹⁸⁾。児童図書について言うなら、この『児童図書

センター報告』がきわめて詳しい。ここに掲載される300語ほどの紹介記事は新聞などの「短評」の枠をはるかに越えているが、さらに、シカゴ大学、次いでイリノイ大学、ジョンズ・ホプキンス大学といった権威ある学術機関が責任を持って刊行しているの、内容への評価は確かなものである。1990年代初頭にシカゴ大学図書館学大学院が廃止となったが、この雑誌をイリノイ大学、ジョンズ・ホプキンス大学が引き続いて編纂・刊行したのは、この雑誌に対する利用者の強い要望があったからであろう。アメリカでは、図書館員ならびに図書館の利用者がこうした紹介により「選書」もしくは自分のための「読書」を決定するのが一般であり、そのためにこの雑誌も多くのレストランに備えられている。イリノイ大学に編纂が移管した1992年以降のものからは、各号には図書館員のための「関係資料」の解説欄もあり、毎号の最後には取りあげた新刊書のテーマ索引が付けられている。現在、編纂を受け持っているイリノイ大学図書館学大学院は、メルヴィル・デューイの弟子カサリン・シャープが1893年に創設したアメリカでも古い、伝統ある図書館学を教授する機関の一つであった¹⁹⁾。

V 『学校図書館ジャーナル (School Library Journal)』 1956-

本誌は書評専門誌ではないが、1956年にはある程度の購読部数が見込めるほどに、アメリカの学校図書館はその活動が活発になっていた²⁰⁾。1960年から1980年にかけ、学校図書館は「メディア・センター」「リソース・センター」「教科メディア・センター」と名称を変える機関が多かったが、この雑誌は誌名を変えなかった²¹⁾。「児童・ヤングアダルト・学校図書館員のための雑誌」という副題が示しており、アメリカの学校図書館活動を支える特集記事も充実しており、毎号30頁以上にわたる（多いときには約180タイトルの紹介記事を掲載する）書評欄は学校図書館での「図書選択」のための必須のツールとなっている。各項目が「学齢前と低学年」「3-6 学年」「ジュニア図書」「ヤングアダルト」など年齢層に基づいて区分され、特に推奨されるものには星印がついている。近刊の予告もリストになっている。国立情報学研究所の「Webcat」でわが国におけるこの雑誌の所蔵状況を調べてみると、玉川大学が11巻（1965）から保存している以外、ほとんどの図書館は1980年代以後にしかこの雑誌を購読していないことが分かる。わが国では読書離れのために学校図書館の活動が見直されるころまで、この雑誌とは縁がなかった事実がここからは見てとれる。とはいえ、近年は復刻版の刊行によりバックナンバーを購入する図書館も見られる。

VI 『ブックバード (Bookbird)』 1963-

スイスのバーゼルに本拠をおく「国際児童図書評議会 (IBBY [International Board on Books for Young People])」の編集委員会が編纂に当たっている季刊の児童・青少年図書の情報提供誌で、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学出版会から刊行されている²²⁾。ここでは個々の出版物が取りあげられるのではなく、世界各国の出版事情が紹介されているので、出版社や書店に主として配付されているが、購読している図書館も多い。IBBY は、児童図書を通じて国際理解を深めようとの意図で、1953年にイエラ・リップマンがチューリヒで設立した団体であり、「国際アンデルセン賞」の授与や「国際子どもの本の日」などの企画を主催し、ユネスコの事業にも参加している。現在、72か国がこの評議会に参加している²³⁾。なお、2010年からは「ブックバード日本語版」が「日本国際児童図書評議会」の協力のもとに刊行された。内容は元版の記事の翻訳と日本人筆者のエッセイからなる²⁴⁾。

VII 『作家についての情報 (Something About the Author)』 1971-

原題は『サムシング・アバウト・ジ・オーサー』²⁵⁾。この名称が示すとおり、児童図書の作家・挿絵画家についての「人物情報」の集成から構成される逐次刊行物であり、A4 版約200頁（索引掲載号は

約350頁）からなる大冊の図書が、創刊から2010年まで219冊を続けて出している。近年は年間10冊程度刊行されている。副題は「若い人たちのための著者ならびに挿絵画家に関する事実と写真」となっている。出版はデトロイトのゲール・リサーチで、ここは1962年からすでに『コンテンポラリー・オーサーズ』をはじめとする各種の人物情報シリーズの刊行で知られていた²⁶⁾。児童図書の人物情報である本書だけでなく、文学関係の膨大な著者情報に関する資料を所蔵している図書館は、アメリカでは大学図書館に限らず数が多い。本書の刊行は、コンピュータによるデータ処理が軌道に乗り始めたところであったことから、データベースの提供も視野に入れた出版局の戦略が見えてくる。

各項目の内容は、両親の略歴、学歴、職歴、所属する学協会、受賞歴に続いて、著者の作品の全リストおよび作品を取りあげた書評の一覧からなり、作者の顔写真といくつかの作品の挿絵もしくは表紙絵が付けられている。特に目立つのは、受賞の記録で、アメリカやイギリスやカナダの団体がいかに多くの賞を児童書に授けているかが分かる。おそらく100を越すであろう。作家の選択は出版社がおこなっている。死去した作家には「死亡記事」が別に書かれるし、何人かの選ばれた知名の作家には、別に20-30頁程度の「自伝記事」を書いてもらっている²⁷⁾。著者名の索引は毎奇数巻の巻末に掲載されるが、現在（Vol.219）ではそれが133頁になっており、おそらく1万名を越えるであろう（児童・青少年文学の作家・画家には、多数の筆名（ペンネーム）を使う作者がかなりいるので、正確な数の算定はむずかしい）。

掲載されている作家および挿絵画家を調べてみると、いくつかの特徴に気がつく。特に幼少の児童向けの本の場合には、挿絵が重要であるが、文章と挿絵とを一人で受け持つケースが増えており、夫妻が協力してその両者を分担する姿も多くなっている。古くはビアトリクス・ポターがいたが、1960年代以降にはトーベ・マリカ・ヤンソンとかディック・ブルーナが知られている²⁸⁾。そして、第二次世界大戦後では、外国系の作家・画家が目立つ。これは、絵や文章の才能で成功を目指す向きが増えたからであった。特異の画才で知られたモーリス・センダックはポーランド移民の息子であった²⁹⁾。そして、この参考図書は「児童」だけでなく「若者」向けの作者も対象となっている。第二次世界大戦後には新たな世代の若者の新たな関心が目立っており、その先駆となったのは、サリンジャーの小説『ライ麦畑でつかまえて』（1951）であった³⁰⁾。

『作家についての情報』でもっとも注目すべきなのは、作家の全作品のリストであろう。一般的に児童・青少年文学の作家は多作が多いが、それにははっきりした理由があった。絵本など、大作とはならず短期間で完成できるものもあったが、それよりも、作品がいったん成功すると、出版社が継続して書くことを要請するからであった。イギリスの作家ウィルバート・オードリーはもっとも良い例であろう³¹⁾。イギリス国教会の牧師であったオードリーが病気になった息子のために『三だいの機関車』を1945年に書いてやると、出版社がもっと書くよう依頼してきた。こうして彼は『機関車トーマス』から始まるシリーズを1972年までに28冊作りあげ、いずれも幼い子どもたちの人気本となっていた。イギリスの作家マイケル・ボンドは「クマのバディントン」その他のシリーズ本を99冊刊行していた³²⁾。絵本よりさらに多数が刊行され、読まれていたのは、作家組織ストラテマイヤー・シンジケートが企画し、複数の筆者に匿名で書かせ続けた少女探偵と少年探偵団の物語で、その前者は、キャロライン・キーン名による「ナンシードルー」その他のシリーズで、少女探偵のナンシーは総計243冊の本で活躍している³³⁾。ストーリーが続くことに感心せざるをえないが、驚くのは、1990年代までシリーズが続刊されていたことである。後者は、フランクリン・ディクソン名の作者が書きついだ「ハーディボーイズ・ミステリーシリーズ」で、こちらは1927年より1992年までに172冊が出され、ディクソンは他にも別のシリーズ本を手がけていた³⁴⁾。アメリカの少年・少女の読書欲が旺盛であったことをこうしたシリーズは語っていた。『作家についての情報』には、各項目の作者の全作品リストに続けて、この著者の作品が批評でどう取り扱われたかの記録がある。この部分もきわめて詳しい。

この著作については、次の点について指摘しておく必要があるだろう。その第一は奇数巻の巻末の「挿絵索引」と「著者名索引」であって、現在（Vol.219）ではこの二つだけで167頁に達しており、一

冊の約半分にあたる。一卷で約80-90名分の作者情報が加わってくるが、「月刊」に近い刊行頻度（このシリーズの刊行は不定期であるが、2010年にはほぼ「毎月」刊行されていた）のこのツールでそれほどの索引が毎回必要なのである。コンピュータでデータ処理していることから、編集は容易であろうが、それにしても頻度が多すぎる。この本は一冊が今では約200ドルであるから、刊行当初からの全巻を揃えるだけで4万ドルを越え、続けて購入している図書館はわが国では少ない。現在ではデータベースでの提供（有料）も行なっている。

ゲール・リサーチでは、このシリーズのほかに、このシリーズが刊行されはじめる以前の児童・青少年分野の参考図書（『児童図書の過去の著者：初期から1960年までの若者たちのための著者および挿絵画家についての事実と写真』³⁵⁾、ならびに『児童とヤングアダルトのための主要な作者と挿絵画家：「作家についての情報からのデータの選集』」³⁶⁾）を別に刊行している。

VIII 『児童文学批評 (Children's Literature Review)』 1976-

前述した『作家についての情報』は作者に関する情報を取りあげ、作者の全著作の一覧を記しているが、刊行された作品についての書評そのものを採録しているのがこの『児童文学批評』³⁷⁾である。本書も同じくゲール・リサーチから刊行されているが、これも膨大なデータ集成である。副書名は「児童と若者のための図書に関する紹介・書評・コメントからの抜粋」であるが、各作者の作品を一点ずつ取りあげ、その作品についての主要な書評を収録している。例えば、最近の号（Vol.147）は、A4版250頁が三人の作者と「児童文学におけるユーモア」という標題の文だけで構成されており、作者は18世紀のイギリスの出版人ジョン・ニューベリー、アメリカの児童向け小説とノンフィクションの作家エスター・フォーブス、現代アメリカのヤングアダルト小説の作家シャロン・マティスが取りあげられている³⁸⁾。各作家の個々の作品がどのように評価されたかを収録した書評により示している。前述の『作家についての情報』と対になって、児童書の作家の作品、ならびに、それに対する評価がデータとして記録されている。これほどまでに詳細な作家と作品に対する情報が提供されているケースは、アメリカ以外のどの国にも見られない。なぜそこまで徹底した記録が必要なのか、それは、主としてアメリカの各種図書館が必要としているからであった。これらの膨大な資料は個人が買えるものではない。ここには出版物に関する情報を重視してきた姿勢が示されており、市民は図書館をよりどころとしてきたからであった。

IX 『若者の声の擁護者 (Voice of Youth Advocates)』 1978-

アメリカの1970年代は「人権運動」が活発であった。これは、1975年の「ベトナム戦争」の終結と機を一にしていた。この時期に刊行が始まったこの雑誌の副書名は「ヤングアダルトに向けて活動する者のための図書館雑誌」となっていた³⁹⁾。書名のみでは内容が不明瞭であったためであろうか、わが国の図書館はこの雑誌にほとんど関心を示していないらしく、前述の「Webcat」によると、継続して収集している大学図書館はわずかに一校（京都大学附属図書館）であり、それもようやく1999年の第22巻からである。

児童と青少年へのサービスを区別する動きは、アメリカでは1960年代から始まり、それまで「ティーンエイジャー」と呼ばれていた若者たちが「ヤングアダルト」として扱われるようになっていた⁴⁰⁾。アメリカ図書館協会がまとめた『公共図書館にとってのヤングアダルト・サービス』がそうしたコレクションの指針となった⁴¹⁾。現在、公共図書館のヤングアダルト・コーナーは、別室を設けるか壁面一杯を飾るまでの盛況である。こうした図書館サービスを支えていた原因もアメリカの社会的背景にあった。すでに「人種のるつぼ」といわれたこの国では外国系の市民が多く、その師弟が活躍が続いていた。統計(2008年)によれば、アメリカの10才から19才の若者の人口は、人種別には以下のとおりであった⁴²⁾。

白人	31,311,000
黒人もしくはアフリカ系アメリカ人	6,517,000
アメリカ・インディアン, アラスカ原住民	514,000
アジア系	1,646,000
ハワイ原住民, 太平洋の住民	90,000
二種族以上の混血	1,089,000
スペイン系	7,893,000
スペイン系以外の白人	24,563,000

毎月約100頁からなる隔月刊のこの雑誌は、頁数の半分以上が書評からなっていた。むしろ「ヤングアダルトに対する図書館」の館員と利用者のための「書評誌」であった。2010年10月号を例にとってみるなら、そこには140冊の新刊書と図書館員のための専門書が、ほぼ200語ずつで紹介されていた。年間800冊以上の本が取りあげられていることになろう。書評欄は「小説」「SF・ファンタジー・ホラー」「ノンフィクション」「シリーズ」「リプリント」に分かれている。各項目には五段階にわたる「読みやすさ」と五段階にわたる「人気テーマ」の評点が記され、さらに「対象年齢」（6-8才、7-9才、10-12才向け、成人図書としても通用する本）という標示が付けられており、すべての項目は署名記事である。紹介の中身はあらすじと評価であって、読み物としても有益である。

雑誌には書評の他に、作家へのインタビューとか海外の出版の動向が掲載されているが、若者が当面する現代の課題（麻薬、堕胎、飲酒、その他）も記事となりうる。この雑誌でさらに注目すべき点は、毎号に掲載される各地のヤングアダルトに向けた図書館のコレクションと活動の実態であって、例えば、首都ワシントンの「マーチン・ルーサー・キング・ジュニア記念図書館」の「ティーンサービス部門」は、約360㎡の独立スペースに4600冊のコレクションを公開している。開館時間は曜日により異なるが、長い時は夜の9時まで、日曜は午後1時から5時まで利用できる⁴³⁾。

アメリカで刊行されるヤングアダルト向けの図書には、本の表紙に絵が付けられていることが多い。「ファンタジー」や「SF」作品の場合はまだしも、現代の高校生の男女が題材となっている作品の場合には「あまり芸術的でない」表紙絵も多い。それにより注目を引くのが慣習となっているからであろう。

X 結語

これまで、アメリカを中心として、児童ならびに青少年の図書についての情報提供を主要な「書評誌」および「作者情報」により比較検討してきた。児童・青少年図書だけを対象とした批評誌の主なものは以上であるが、書評は成人向けの本とともに他のツール（雑誌や新聞等）でも取りあげている。『ニューヨークタイムズ・ブックレビュー』とか『タイムズ・リテラリー・サプリメント』（イギリス）といった代表的な新聞の書評欄にも扱われるし、図書館情報学の専門誌にも書評欄があるので、図書情報の提供は相当な分量に達している⁴⁴⁾。ここでは、結論としていくつかの点を指摘しておきたい。

第一に、このジャンルの出版点数の多さがある。外国語からの翻訳を含め、特に英語のものは盛況である。これは、英語が世界的な通用語になっているためであるが、それを受けて多数の作家や挿絵画家がアメリカの出版社で自作の発行を望むからである。アメリカの出版社の編集者たちは、外国の才能までを探し求めている。「国際図書見本市」での児童書の翻訳出版の契約も盛況であるが、出版社にとってはこの方面のものが刊行しやすいのも理由の一つであろう。こうして、日本の安野光雅の作品が紹介され、オランダのディック・ブルーナの絵本がアメリカで翻訳される。

第二に指摘すべき点は、児童書といえども時代的な背景を反映しており、上記の書評誌の比較検討により、児童・青少年の図書も時代的な変遷を経ていたことが分かるであろう。19世紀までは学齢前の子

どもの読書はあまり問題にされていなかったため、児童書の出版点数は多くなかった。全国的な公教育が施行されたのは、イギリスでは1870年代以後であった。内容から見ると「児童書の新時代」は20世紀初頭から始まっており、それを反映していた『ホーン・ブック』の書評と紹介は画期的な存在であった。この時期のアメリカは「エネルギーの時代」と呼ばれ、社会に活気がみなぎっていた⁴⁵⁾。第二次世界大戦以降は、学校における「読み書き」教育が重視されたために親たちも子どもの読書に関心を向けた。学校図書館の活動が活発になったのはそれほど昔ではない。そして、国際化が進む1960年代以降、特にアメリカには世界各地から移民が押し寄せ、彼らは自分の能力に合った仕事を求めた。さらに、1970年代には「人権運動」その他、さまざまな社会意識が高まっていった。児童・青少年の図書もこうした時代背景を反映していた。換言するなら、第二次世界大戦終了までのアメリカとイギリスは児童図書市場の中心的存在であり、戦後の1960年代頃まではアメリカが「空前の繁栄と安泰」の時期にあったが、1970年代以降はさまざまな価値観が交錯する時期を迎えていた。

こうした社会的な状況のもと、執筆者と出版社の意識も変わっていた。才能さえあれば文章および絵画で身をたてようとする若者が増えていた。アメリカにあつては、児童ならびに若者の出版の盛況も、それを読ませようとする親たちの状況も、社会のこうした経緯から生じており、書評もまたそれぞれの時代を反映していたと言ってよい。

注

- 1) *Uncle Tom's Cabin*, by Harriet Beecher Stowe; *Alice's Adventure in Wonderland*, by Lewis Carroll; *Little Women*, by Louisa May Alcott; *Adventures of Tom Sawyer*, by Mark Twain; *Little Lord Fauntleroy*, by Frances Hodgson Burnett.
- 2) *The Tale of Peter Rabbit*, by Beatrix Potter; *The Wind in the Willows*, by Kenneth Grahame; *Winnie-the-Pooh*, by A. A. Milne; *Millions of Cats*, by Wanda Gag.
- 3) Dr. Seuss; Maurice Sendak; Tove Jansson; Dick Bruna.
- 4) *The Horn Book*, 1924-1944 and *Horn Book Magazine*, 1944-, Boston: Horn Book.
- 5) Stratemeyer Syndicate, *Hardy Boys Series*; *Nancy Drew Series*; *Tom Swift Series*.
- 6) *Ragged Dick* (1867) and others, by Horatio Alger, *Something about the Author*, Volume 16.
- 7) Bertha Mahony (Miller), first editor (1924-1951) of *The Horn Book*.
- 8) Randolph Caldecott, 1846-1886, English Illustrator of Children's Books.
- 9) Anne Carroll Moore, 1871-1961; Frances Clarke Sayers, 1897-1989; Lillian Helena Smith, 1887-1983.
- 10) Sayers, Frances Clarke, *Anne Carroll Moore: A Biography*, New York: Atheneum, 1972.
- 11) 'Three Owls Notebook' columns by Anne Carroll Moore, in *The Horn Book*, 1936-1961.
- 12) *A Horn Book Sampler, on Children's Books and Reading: Selected from Twenty Five Years of The Horn Book Magazine 1924-1948*, edited by Norma R. Fryatt, Boston: Horn Book, 1959, 261p; *Horn Book Reflections, on Children's Books and Reading: Selected from Eighteen Years of The Horn Book Magazine 1949-1966*, edited by Elinor Whitney Field, Boston: Horn Book, 1969, 367p; *Crosscurrents of Criticism: Horn Book Essays 1968-1977*, selected and edited by Paul Heins, Boston: Horn Book, 1977, 359p.
- 13) 編集長は以下のとおり Bertha E. Mahony, 1924-1951; Jennie Lindquist, 1951-1958; Ruth Hill Viguers, 1958-1967; Paul Heins, 1967-1974; Ethel L. Heins, 1974-1985; Anita Silvey, 1985-1996; Roger Sutton, 1996-.
- 14) *The Junior Bookshelf: A Review of Children's Books*, Huddersfield: Marsh Hall, 1936-1996.
- 15) Niall, Brenda, 'Children's literature' *The Penguin New Literary History of Australia*, edited by Laurie Hergenhan, Penguin Books Australia, 1988, pp.547-559.
- 16) *Bulletin of the Center for Children*, edited by the Graduate School of Library Science, University of Illinois, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1945-.
- 17) Carnovsky, Leon and Swanson, Don R., 'Chicago. University of Chicago, Graduate Library School' *Encyclopedia of Library and Information Science*, edited by Allen Kent and Harold Lancour, New York: Marcel Dekker, 1970, Vol.4, pp.540-542.
- 18) *Choice*. American Library Association 1964-, Monthly; Doiron, Peter M., 'Choice' *Encyclopedia of Library and Information Science*, edited by Allen Kent and Harold Lancour, New York: Marcel Dekker, 1970, Vol.4, pp.658-659.
- 19) Grotzinger, Laurel A., *The Power and the Dignity*, Metuchen, N. J.: Scarecrow Press, 1966.

- 20) *School Library Journal: The Magazine for Children's, Young Adults and School Librarians*, New York: Bowker, 1956- .
- 21) Herring, James E., *School Librarianship*, 2nd ed., Bingley, 1988; Lowrie, Jean E., 'School library and Media centers' *Encyclopedia of Library History*, edited by Wayne A. Wiegand and Donald G. Davis Jr., New York: Garland Publishing, 1994, pp.564-570.
- 22) *Bookbird: A Journal of International Children's Literature, The Journal of IBBY (the International Board on Books for Young People)*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1963- .
- 23) <http://www.bookbird.jp/> 「Bookbird」 (採録日：2011年5月31日).
- 24) 『ブックバード日本版』 (季刊), マイティブック, 2010- .
- 25) *Something about the Author: Facts and Pictures about Authors and Illustrators of Books for Young People*. Detroit: Gale Research, 1971-. (219 vols, 2010).
- 26) *Contemporary Authors: A Bio-Bibliographical Guide to Current Authors*, Detroit: Gale Research, 1962- .
- 27) *Obituary Notices and Autobiography Features* are included for some Authors in each Volume.
- 28) Beatrix Potter, 1866-1943, British Author-Illustrator; Tove Jansson, 1914-2001, Swedish Author-Illustrator; Dick Bruna, 1927-, Netherlands Author-Illustrator.
- 29) Maurice Sendak, 1928-, American Author-Illustrator.
- 30) *The Catcher in the Rye*, by J. D. Salinger, New York: Little, Brown and Company, 1951.
- 31) Wilbert Vere Awdry, 1911-1997, British Author-Illustrator, *Something about the Author*, Volume 67.
- 32) Michael Bond, 1926-, *Something about the Author*, Volume 58.
- 33) Carolyn Keene (collective pseudonym), *Something about the Author*, Volume 100.
- 34) Franklin W. Dixon (collective pseudonym), *Something about the Author*, Volume 100.
- 35) *Yesterday's Authors of Books for Children: Facts and Pictures about Authors and Illustrators of Books for Young People from Early Times to 1960*, Detroit: Gale Research, 1977, 2 vols.
- 36) *Major Authors and Illustrators for Children and Young Adults: A Selection of Sketches from Something about the Author*, edited by Laurie Collier and Joyce Nakamura, Detroit: Gale Research, 1993, 6 vols.
- 37) *Children's Literature Review: Excerpts from Reviews, Criticism and Commentary on Books for Children and Young People*, Detroit: Gale Research, 1976-. (147 vols, 2010).
- 38) *Children's Literature Review*, Volume 147, edited by Tom Burns, Detroit: Gale Research, 2010. (Contents: Esther Forbes 1891-1967; Humor in Children's Literature; Sharon Bell Mathis 1937- ; John Newberry 1713-1767).
- 39) *Voice of Youth Advocates, the Library Magazine Serving those who Serve Young Adults*, Metuchen, N. J. : Scarecrow Press, 1978- .
- 40) Steinfurst, Susan, 'Young adults services' *Encyclopedia of Library History*, edited by Wayne A. Wiegand and Donald G. Davis Jr., New York: Garland Publishing, 1994, pp.663-665.
- 41) *Young Adult Services in the Public Library*, Chicago: American Library Association, 1960, 50p.
- 42) Honnold, RoseMary, 'The Diversity of Our Teen Audience' *Voice of Youth Advocates*, Vol. 33, no.3, August, 2010, p.193.
- 43) Rockefeller, Elsworth, 'Martin Luther King, Jr., Memorial Library, Washington, DC., Teen Space' *Voice of Youth Advocates*, Vol. 33, no.3, August 2010, pp.224-226.
- 44) *New York Times Book Review : Times Literary Supplement*, etc.
- 45) *The Age of Energy: Varieties of American Experience, 1865-1915*, by Howard Mumford Jones, New York: Viking Press, 1971, 545p.

※) 資料面では特に大阪国際児童文学館および梅花女子大学図書館、石川県立図書館の所蔵資料を使わせていただいた。

(2011年7月1日掲載決定)